第２３話　吉備真備と阿倍仲麻呂

遣唐使と留学生とはわが国を進歩させる上に最も力のあった人々ですが、
彼らが中国へ赴くには、非常に危険な航海をしなければならなかった。
奈良時代の留学生の中では、吉備真備と阿倍仲麻呂とが最も聞こえている。

遣唐使とそれに連れられて行った留学生とが、盛んに中国の文物を輸入して、大いにわが国の進歩を助けたことは、既にしばしば述べた通りですが、とりわけその最も盛んだったのは奈良時代でした。しかし、その頃は、航海の術も幼稚でしたし、船も丈夫ではなかったので、彼らが中国に赴くことを、今日の人がアメリカやヨーロッパへ行くように簡単な、安全なことだと思ってはいけません。

遣唐使の船

遣唐使の船は、初めは二艘でしたが、後には四艘が普通となったので、これを よつのふね ともいいました。　この四艘の船は互いに連絡を取って、助け合いながら行ったのですが、一度暴風雨にでも遭うと、忽ちはなればなれになって、難船したり沈没したりした。　従ってそのまま命を失うものが可なり多く、命を失わないものも非常な難儀をして行ったり還ったりするのが普通でありました。　実に、命がけの役目だったのです。

それで、朝廷でも遣唐使は特に重んぜられて、節刀を賜り、位階を昇せた上に、更に送別の宴を開いて天皇から御製の詩や歌を賜ったりした。　また、その航海の安全を祈るために、伊勢の神宮やその他の神社にお使いを出されて、よつのふね に位をお授けになったりした。

留学生と留学僧

遣唐使には、いつも留学生を連れて行かせられた。　留学生は、幼少の時からよく学問が出来て、将来の見込みのある者の中から選んだが、それが普通の人なら留学生で、僧侶であれば留学僧とか学問僧とかいった。　つまり遣唐使は、唐との交際を平和に、円満にするために唐の朝廷に遣わされたものですが、ひとつは有望な青年を唐に送って留まって学問を修めさせると共に、既に修業の終えた留学生や留学僧を連れて帰るのをその目的としたのであります。

唐に留学した者がどのくらいの人数であったかは正確には分からないが、奈良時代だけでも五回の遣唐使を出され、そのうち、最も多くの留学生を送ったと伝えられる**元正天皇**の時には、550 人であったというので、全体ではずいぶん多くの人数に上ったでしょう。　その中には、不幸にも難船して行方不明になった者もあれば、唐で死んだ者もいましたが、無事に修業して帰って来た人々は、その学んだ道で朝廷に仕えて、わが国を進歩させる上にそれぞれ力を尽くしたのであります。

吉備真備

その多くの留学生の中で、奈良時代で殊に名高いのは、**吉備真備**と**阿倍仲麻呂**とです。　**真備**は 25 歳の時に唐に渡って、43 歳で日本に帰って来るまで、ほとんど 20 年の間、一刻の時間も惜しんで勉強して、

儒学をはじめ、法律、天文、兵法、音楽などから、その頃の学問という学問には一つとして通じないものはないほどになり、彼の地の大家にまでその才学を驚嘆されたくらいでした。

帰朝の後は重く朝廷に用いられて、わが国に初めての大きな城を筑前（福岡県）の怡土に築いたり、軍政を改革して始めて新式な兵隊の調練をしたり、政治の上にもいろいろな手柄を立てて、ついに右大臣にまで昇進しました。

第４７代**淳仁天皇**の御代に、**恵美押勝**という者が叛いて兵を挙げた時に、**真備**は官軍に軍略を授けて、僅か七日の間に**押勝**を滅ぼしたが、その軍略のすぐれていることには誰一人として驚かないものはなかったということです。　彼は実に奈良時代に於ける第一の学者として、中国の学問や技芸をわが国に伝えたと共に、又、第一の武人でもありました。

阿倍仲麻呂

仲麻呂が留学生として選ばれたのは、僅かに16歳の時でした。　彼は17歳の時に**真備**と一緒に唐に渡ったが、幼少の時からその才学が大いにすぐれていたので、間もなく唐人の間にも評判される程の学者となり、ついに唐の**玄宗皇帝**に知られて信任せられ、王子の**儀王**の友として朝廷に出仕させられました。

それが始めで、次第に官も昇り、後には名も中国風に**朝衡**と改めたが、しかし、どうして日本を全く忘れることが出来ましょうか。

彼が唐に渡ってから37年を経て、53歳になった時に、遣唐使の**藤原清河**が行きますと、**仲麻呂**はこの**清河**の一行と共に日本に帰りたいと**玄宗皇帝**に願い出ました。

皇帝は**仲麻呂**の才学を惜しんで、容易に許してくれませんでしたが、終に彼の心中を察せられて、日本の使臣を送っていくということにして帰朝を許されました。　37年振りで生まれた国に帰れることとなった**仲麻呂**の心はどんなに躍ったことでしょう。　しかし又、37年間も安穏に暮らして来た唐の国にも愛着が残らずにはいなかったろう。

彼は明州という港まで来て、そこまで見送って来てくれた唐の人々とも、いよいよ別れなければならなくなった時に、宴を開いて、互いに詩などを作って名残を惜しんでいた。　そのうちに夜が更けて、十月の二十日ばかりの月が静かに東の空に昇って来ました。

おお、月！　その月の前にはきらきらと光っている大きな海が涯しなくもなく続いています。　天はよく晴れて一片の雲もありません。　**仲麻呂**はじっとその月を見ているうちに、思わず涙をはらはらとこぼしました。

昔、子供の時分に、その月がぽっかりと奈良の三笠の山に昇った時のことが、ふと思い出されたのです。　その懐かしい山の姿がありありと眼に浮かんで来たのです。　彼は筆を執って、しづかに口吟みながら、

天の原　ふりさけ見れば　春日なる　　三笠の山に　出でし月かも

と書きました。

中国　明州　　遥かに故郷の空を望む 阿倍仲麻呂

唐に来てから 37 年、中国の詩ばかり作っていたのに、この時は思わず知らず日本の歌を詠みました。しかし、かの地の人にはその意味が分からないので、彼がそれを中国の詩に訳して見せますと、誰も皆、**仲麻呂**の心の中を思いやって、共に涙を流したということであります。

ところが、この時の航海は、初めの幾日かは海上も穏やかでよかったのですが、今の琉球近くに来た時から、俄かに暴風が吹き起こり、怒涛天を浸し、忽ち四艘の船は離ればなれに吹き流されてしまいました。　一艘は薩摩（鹿児島県）の阿多の海岸に、一艘は紀伊（和歌山県）の牟呂崎に、もう一艘は、それから半年も経ってから、やはり薩摩の石垣浦というところに流れ着いたが、**仲麻呂**や**清河**の乗った船は、ついにどこへ行ったか分りませんでした。

この事が唐の都の長安に伝わると、その地の　人々は、**仲麻呂**らの船は沈んで、みんなは死んでし

まったのに違いないと思ったので、その頃の唐で第一の詩人でありました**李白**を始め、多くの人々は詩を作って**仲麻呂**の死を悼んだのでありました。

ところが、その後しばらくしてから、**仲麻呂**と**清河**とはひょこりとまた長安に帰って来たのです。彼らの船は暴風のために吹き流されて、今の安南（ベトナム）に漂着したのでした。　それで、二人はそこから陸路を長い間かかって、漸く長安に戻って来たのです。

しかし、間もなく唐には内乱が起り、国内が大変な騒ぎとなったために、二人は日本へ帰ることが出来なくなり、ついにまた**仲麻呂**は唐の朝廷に仕えて、ますます重く用いられたが、第 49 代**光仁天皇**の御代の初めに長安の都で亡くなりました。　歳は 70 才でした。

帰朝して日本の為に尽くすことが出来なかったのは、**仲麻呂**としても残念だったでしょうが、50 年以上も唐に留まって、高い位に昇り、日本から行く遣唐使や留学生のために、いつもいろいろの便宜を計ってくれたことを思えば、それもまた手柄であったといえます。

（ **第２３話　吉備真備と阿倍仲麻呂**　終わり。

次は一旦前頁に戻り、 第２４話　奈良時代の学芸美術 へ）